

日本の現代バレエを切り開いた舞踊家

—横井茂の軌跡—

吉岩正晴

はじめに

2008年2月10日（日）、新国立劇場・中劇場で『舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル』が催された。プログラムは「限りなき白へ」「夕映えに」「トロイの木馬」の3作品で、「トロイの木馬」は意欲的な新作であった。

横井茂の言葉によれば、「トロイの木馬」の創作を思い立ったのは、2007年に起きたライブドア事件の報道であったという。「これから必ず次々と内部告発による社会の内部崩壊が起きる、きっと、もっと大きな社会現象に出会うだろうと予感しました。そして古代ギリシャ時代の“トロイアの悲劇”に思いはたどり着き、舞踊作品化する事に致しました⁽¹⁾」

“作品に現代を投影させる”という思想は横井茂の一貫して変わらぬ創作姿勢の一つである。横井茂によれば、社会のニュースで気になるものが頭の中にく

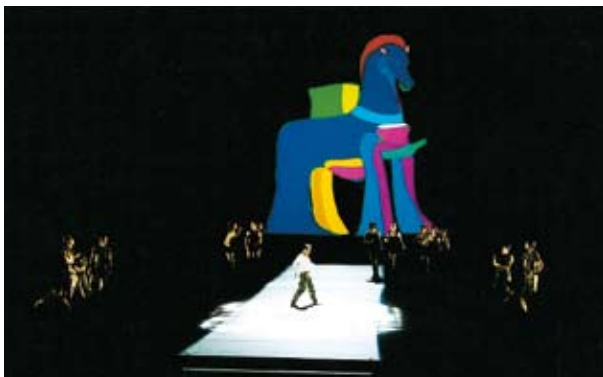
つか残っていて、来年はこれをやろうと突然ひらめくのだという。演劇に携わっている筆者から見ればごく当然のことだが、舞踊の世界となると、他の舞踊作家には見られない創作姿勢である。

舞踊化された「トロイの木馬」は、77歳の横井茂の若々しい発想と鮮烈な演出によって驚嘆すべき作品となっていた。背景幕には大阪芸術大学デザイン学科教授松井桂三の映像デザイン⁽²⁾によるコンピューターグラフィックスで描かれたた色鮮やかで巨大なトロイの木馬が映し出され、舞台上に爆音を轟かせて5台のオートバイ（ハーレー）に乗った迷彩服のギリシャ軍兵士たちが登場する。背広姿の現代人も登場する。

この“意表をつく斬新な発想”こそ、初振付作品から最新作に至るまで、これまた横井茂の一貫して変わらぬ創作姿勢である。舞踊評論家林愛子は「このダイナミックで意表を突く展開には、作者の、時代に対する骨太な批評精神と創作に対する旺盛な意欲がみなぎっていた⁽³⁾」と評している。

1957年の初振付作品「美女と野獣」で舞踊作家として鮮烈なデビューを飾って以降、古典バレエが人気を集める時代に創作バレエを次々と発表して日本のバレエ界をリードし続け、一方で後進の指導育成に情熱を注いでバレエ・モダンの両分野に優れた人材を送り出してきた横井茂。

『藝術』の「理論と研究」シリーズで大阪芸術大学名誉教授横井茂の舞踊生活60年の軌跡を辿ることは有意義なことだと思う。



「トロイの木馬」(2008)

1. 能楽宝生流宗家に生まれて、バレエの世界へ

横井茂は1930年5月24日、能楽宝生流17代宗家宝生九郎の三男に生まれている。宝生流は長兄の英雄が継いで、下の二人は能から離れていたという。文芸評論家で舞踊研究家でもある三浦雅士との対談の中で横井茂自身が語っているが「私は医者になりたいと思い、中学では生物特別研究班という医者の卵のための班にいました。子供のころ身体があまり丈夫ではなく、医者のお世話になっていたの、憧れていたんです」⁽⁴⁾ 能を習うことはなかったが、4歳くらいから週1回、水道橋宝生会館で能を見ていたというから、能に関する素養は深く培われたであろう。このことがその後の横井茂の創作活動と奥深いところで繋がっている。

横井茂がバレエへの道に進むきっかけになったのは、1946年8月に旧帝国劇場で「白鳥の湖」を見たことだったという。東勇作、服部知恵子、島田廣、貝谷八百子、小牧正英らが第一次東京バレエ団（1946～1950）を結成しての上演だったが、その時のことを横井茂はこう語っている。「帝劇の周りは焼け野原で何もなかったけれど、舞台の美しさは一生忘れられない。見終えて表に出たときには、もう医者なことなど頭から飛んでしまって、“ぼくはバレエをやる！”と曲がり角をパッとまがってしまったんです」⁽⁵⁾

あちこちバレエ教室を探して踊りを習った後、1948年に小牧バレエ団（1946～）に入団し、翌1949年11月に東京バレエ団第6回公演「シェヘラザード」（旧帝国劇場）で初舞台を踏んだ。1954年に小牧バレエ団を退団し、東京バレエ協会の結成に参加、翌1955年の東京バレエ協会公演「ジゼル」（旧帝国劇場）に主役のアムブレヒトで出演している。

横井茂は日本人には珍しく若くして舞踊作家への道を歩みだしている。

記念すべき初振付作品は1957年の「美女と野獣」。この作品を作ろうと思ったのは、ジャン・コクトー

（フランスの詩人、前衛芸術家。1889～1963）にすごく影響されてのことだったという。三浦雅士との対談の中で横井茂は「（同じコクトーの映画でも）じつは『美女と野獣』よりむしろ『オルフェ』（1949）の、世界が反転するような映像に大きな影響を受けました。この世の三次元にとどまらない世界はあの映画が教えてくれた」⁽⁶⁾と語っている。「美女と野獣」は横井茂・大田招子バレエ団公演（日本青年館）としての上演で、舞踊作家としての将来を決定づける画期的な舞台となった。27歳の時である。

この作品で、横井茂は舞台装置を一切使わず、森、門、城、鏡など舞台の背景をすべて男女6人ずつのダンサーたちの身体をオブジェに組んで表現した。ダンサーたちにボディタイツを全身、顔まで被らせて、そこに血管の人体図のような絵を画家小原しように描いてもらった。人体図を描いたことについて横井茂は「医者を目指して、医学関連の本を見ていた影響もあったと思います」⁽⁷⁾と語っている。初振付作品ですでに“意表を突く斬新な発想”を見せたのである。筆者とのインタビューの中で、この時のことを振り返って横井茂はこう語っている。「当時はお金がなくてちゃんとした装置を作れなかったのです」だが、半世紀以上も前のあの当時、おそらく他の誰にも思いつけないアイデアであったことは確かである。

また、後年、ある賞の授賞式の時、「どうしてこんなに物を省略できるのか不思議だったけれど、能役者の息子だったからなんだね」⁽⁸⁾と言われたそうである。このことは、横井茂作品を考える時、大変重要な要素である。筆者と横井茂との出会いは22年前、1987年のことだが、それ以降に拝見した作品の多くはこの思想が背景にあるように思える。極端に省略されたストイックな舞台構成一という特長が見られるからだ。

演劇の分野では英国の演出家ピーター・ブルック（Peter Brook、1925年～）が1968年に「なにもない空間」（The Empty Space）を著し、「どこでもいい、なに

もない空間—それを指して、わたしは裸の舞台と呼ぼう。ひとりの人間がこのなにもない空間を歩いて横切る、もうひとりの人間がそれを見つめる—演劇行為が成り立つためには、これだけで足りるはずだ⁽⁹⁾と述べている。「エリザベス朝の劇場に装置がなかったことは、自由の最大の源の一つになっていたという事実に、わたしたちはやっと気づくようになった⁽¹⁰⁾と。英国の質の高い舞台には簡素な舞台装置のものが多く、観客には想像力がある。装置が簡素なほど観客の想像力に多くのものを訴えることが出来るからである。もっともピーター・ブルックの演出する舞台に本当に“何もない”わけではなく、アントン・チェホフ (Anton P. Chekhov, 1860～1904) の「桜の園」(1981) では劇場の床平土間一面に敷かれた絨毯だけで大きな効果を上げ、古代インドの長編叙事詩にもとづく「マハーバーラタ」(1985) では舞台一面に砂が敷き詰められ、篝火が焚かれた。舞台装置が簡素なほど観客の想像力に多くのものを訴えることが出来る例としては、サミュエル・ベケット (ノーベル文学賞受賞のアイランド出身の劇作家。1906～1989) の「ゴドーを待ちながら」(Waiting for Godot, 1952) がある。この作品では、舞台中央に大きな一本の木が象徴的に置かれているだけである。日本の劇作家別役実 はベケットに触発されて「舞台上に一本の電信柱」という空間を作り上げている。

横井茂作品の舞台には、ピーター・ブルックの思想に近いものがある。しかしながら、装置などなくても空間があれば演劇は成り立つ、リアルな装置がないほうが観客の想像力を喚起させるには効果的だという考え方は、日本人から見ればそう目新しいものではない。能舞台はまさにそういう空間であり、観る者の想像力を喚起させる舞台芸術である。ピーター・ブルックを引き合いに出すまでもなく、能楽の家に生まれ、幼い頃から能に親しんできた横井茂にとっては当然の帰結であったと思う。

2. 東京バレエグループの結成と

シェイクスピア作品シリーズ

1960年、横井茂は「真の日本人の手による日本のバレエの創造」を活動の主題として、東京バレエグループを結成する。同年、東横ホールで第1回公演「オルフェ 1960」「無言歌」「城砦」を上演し、文部省芸術祭奨励賞と舞踊ペンクラブ作品賞を受賞した。

1962年、東京バレエグループ第3回公演「ハムレット」で文部省芸術祭奨励賞、個人として舞踊ペンクラブ演出賞を受賞し、以後、「リチャード三世」(1964、文部省芸術祭賞、舞踊ペンクラブ作品賞)、「マクベス」(1965、文部省芸術祭主催公演)、「オセロ」(1966、文部省芸術祭奨励賞)、「リア王」(1967、文部省芸術祭奨励賞)、「ロミオとジュリエット」(1970、文化庁芸術祭主催公演。第一回舞踊批評家協会賞)と、怒濤のようなシェイクスピア作品シリーズが続いた。インタビューの折、シェイクスピア作品を多く取り上げた理由について、「みんながよく知っている物語を自分なりにやってみたかった」からだと言っている。

これらのシェイクスピア作品の中で特筆すべきものは、やはり1964年の「リチャード三世」である。横井自身が「どうしてあんなむつかしいものをやったのかと聞かれましたが、リチャード三世の悪、強い個性に興味があった⁽¹¹⁾と述べている。いわゆる舞台装置はなく、大きな2枚のパネルを移動させることで効果的に舞台に変化を持たせ、“悪夢の時”シーンではリチャード三世がこの2枚のパネルに挟まれて紙のようにぺしゃんこになって死ぬ、といった演出であった。パネルに仕掛けがしてあったので、観客にはリチャード三世が本当に2枚のパネルの中に消えてしまったように見えたという。これは誠に秀逸な演出だった。

横井茂との対談の中で三浦雅士は「コリオグラファーとして、横井茂さんと関直人さん⁽¹²⁾は全く正対に進む。関さんは抽象的でミュージカル風なバラ

シン⁽¹³⁾の方向。横井さんは物語的でドラマティックなクランコ⁽¹⁴⁾やマクミラン⁽¹⁵⁾の方向。大雑把に言えばそうなる⁽¹⁶⁾と述べている。筆者が拝見した、あるいは仕事を一緒した横井茂作品の多くは物語性のあるドラマティック・バレエだったことを思うと、これが横井バレエのもう一つの特徴と言えるかも知れない。

1970年の「ロミオとジュリエット」を最後にシェイクスピア作品とは一旦離れるが、1993年に再開し、東京グローブ座において「夏の夜の夢」(1993)、「オフィーリアは水の精」「リチャード三世」(1994)、「リア王」(1995)、「冬物語」(1996)、「テンペスト」(1997)を上演している。これほど多くのシェイクスピア作品を取り上げた舞踊作家は他にいないと思うが、シェイクスピアは物語性のあるドラマティック・バレエを創作するには最適の素材であったと言えるだろう。



「リア王」(1995)

ただし、シェイクスピアをただ舞踊化したわけではなく、どの作品にも横井茂らしい“意表を突く発想”が見られる。「リア王」は舞台を精神病院に置き換え、最後は舞台上方から大きな檻が降りてきて、リア王はその檻の中で手に持った花を食べてしまうし、「ロミオとジュリエット」では舞台中央にブロンズで作られた抽象的な墓が一つ置かれただけの空間で全ての物語



「リチャード三世」(1994)

は進行する。横井茂作品では音楽の使い方の上手さが際立つが、1970年の「ロミオとジュリエット」でもポピュラーなセルゲイ・プロコフィエフ（ロシアを代表する作曲家。1891～1953）のバレエ音楽を使わず、ロマン派を代表する色彩感豊かな絵画的描写のエクトル・ベルリオーズ（フランスの作曲家。1803～1869）を使ったところにその真骨頂が伺える。余談だが、現代日本を代表するバレエダンサー森下洋子と清水哲太郎（共に松山バレエ団）はこの作品で出会い、後に結婚することになる。

3. シェイクスピアから日本現代へ

1970年代に入ると、横井茂の取り上げる題材に大きな変化が見られる。日本の近現代史をテーマに創作することが多くなったのだ。これは1967年から1968年にわたり文部省海外派遣芸術家在外研修員の第一期生としてアメリカ、ヨーロッパの舞踊状況を見て回ったことと無関係ではないようだ。筆者とのインタビューの中で横井茂は「バレエはインターナショナルなものと思われているが、ナショナリティがあって初めてインターナショナルたりえるということを感じ、胴長短足に合うバレエを作ろうと思った」と語っている。日本人として外国に発信出来る材料は何かを考え、帰国後の最初の作品には被爆体験を投影させた旧約聖書にある「ソドムとゴモラ」(1969年/文化庁芸術祭奨励賞)を創作している。

その後さらに日本の題材を考えるようになり、「鮫」(1972、文化庁芸術祭優秀賞)、「皇子の名はタケル」(1973)、遠藤周作の小説を舞踊化した「沈黙」(1976、芸術撰文部大臣賞)等を創作した後、北海道の囚人たちの話をもとに創作した「白炎」(1978、文化庁芸術祭優秀賞)、BC級戦犯を題材にした「昭和二十年夏」(1979、文化庁芸術祭優秀賞、橘秋子賞新人賞)、しらうめ隊(白梅学徒隊)⁽¹⁷⁾を題材にした「さとうきび畑の墓標」(1981)と続く。

これらの一連の作品の中でも特筆すべきは「昭和二十年夏」(東京・郵便貯金ホール)である。この舞台、残念ながら私は見ていないが、DVDでの記録映像を見ただけでも、驚駭すべき作品であったことが分かる。この作品、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の交響曲第九第4楽章で始まり、かの有名なフリードリヒ・フォン・シラー(1759～1805)の「歓喜に寄す」による独唱と合唱が終わりかける頃、突然、空襲警報が鳴り響いて音楽が中断され、舞台は第二次世界大戦末期の米軍による徳島空襲



「昭和二十年夏」(1979)



「昭和二十年夏」(1979)



「昭和二十年夏」(1979)

の日に変わる。爆弾が落ち炸裂する音、けたたましいサイレン音の中を逃げ惑う人々の姿が踊りで表現される。そして、高射砲弾を被弾した軍機から落下傘で脱出した黒人米兵が蛙の鳴き声の合唱の中を逃げ回る場面が変わる。夜の暗闇の中、蛙の大合唱が黒人米兵の不安感を増幅する。見事な音の使い方である。

そして一人の若い一等兵と黒人米兵との出会い。一等兵は彼を逃がそうとする。そして二人の間には妙な友情のようなものが生まれる。鉦の音の中での踊り、オルゴールによる童謡「夕焼け小焼け」の踊り、黒人米兵の吹くハモニカによる「オールド・ブラック・ジョー」の踊り、横笛や太鼓や三味線の阿波踊り音楽によるダンシングシーンなどでその心象イメージが表現されるが、「夕焼け小焼け」と「オールド・ブラック・ジョー」のシーンはほっと心が静まる。

阿波踊り音楽によるダンシングが突如ストップモーションとなり、捕らえられた黒人米兵が刺殺されるシーンが変わる。全くの無音の中、憲兵の持つ竹刀が床を叩く音だけが不気味に響く。やがて夏の盛りの蝉の声の中、憲兵は逡巡する一等兵を脅迫的命令で追いつめて行き、ついに一等兵は黒人米兵を竹槍で刺殺するに至るが、ここでは夏の盛りの蝉の声が時にはけたたましい程に高まり、不安感をあおる。前述の蛙の大合唱といい、横井演出は効果音の使い方がまことに秀逸である。この11分間のシーンは緊迫感に溢れ、きわめて演劇的である。そして、阿波踊りのシーンが変わるが、これは昭和23年に阿波踊りが復活したことを平和を取り戻した日本の象徴として表現したものであろうか。阿波踊りがゆっくりと溶暗し、場面は天井から吊り下げられた戦勝五大国の国旗の下での軍事法廷へと変わる。英語（米語）による判事の声で始まり、以後、英語と日系二世が通訳する日本語とが飛び交う。戦犯となった元一等兵の「命令されて止むなくやった」という無罪の主張も、証人に立った元憲兵の「捕虜の処刑を命令したことはない。こんな男は会ったことも

見たこともない」という証言が採用され、弁護人の「哀れな子羊を生け贄にするだけのショーだ」という反論は退けられ、元一等兵は絞首刑を宣告される。この19分間のシーンは演劇そのものである。舞踊作品の中に演劇が挿入されているわけだが、この場面の横井茂演出は、演劇の演出を専門とする者の目から見ても見事の一言である。英語と通訳による日本語のやり取りはバランス、テンポが実によく、検事と弁護人のやり取りは緊迫感に満ちている。元憲兵や元一等兵の演技もダンサーとは思えない秀逸さである。

法廷場面が終わると、ゆっくりと第九第4楽章の後半部分が流れ、世界50数カ国の国旗の下、踊りのシーンが始まる。その踊りの終幕で、元一等兵は絞首刑となり、天井高く吊り上げられていく。この場面は涙を禁じ得ない。第九が終わり、遠くから阿波踊りの鳴り物が聞こえてきて、舞台上方に絞首刑になった元一等兵が吊り下げられている下で、平和を取り戻した日本の象徴としての阿波踊りが始まる。だが、楽しいはずの阿波踊りが何とも悲しく切なく見える。その阿波踊りが突然ストップモーションとなり、無音の中、ゆっくりと幕が下りる。この幕切れの演出は息をのむ見事さである。

こういうものは芝居でならやって当然の題材だが、舞踊でやったことに私は驚きを禁じ得ない。私の頭の中にある“バレエ”の概念を根本から覆すものだ。BC級戦犯を扱うという発想、台詞入りの芝居の場面、ベートーヴェンで始まり阿波踊りで終わる。これまた“意表を突く斬新な発想”という横井茂の神髄を示す作品となっている。裁判の場面では、客席から「やめろ！ 踊りをやれ！」と弥次が飛んだそうさ。

「昭和二十年夏」や「さとうきび畑の墓標」を創作するにあたっては、横井茂は実際の取材活動も行っている。「昭和二十年夏」の取材では、親交のあった川口幹夫元NHK会長に頼んで記者証（腕章）をもらって阿波踊りの取材が出来たとか、創作につきまとう苦労も多かったようだ。

4. 文化庁芸術家在外研修員の会での

クロスオーバーなコラボレーション

ここで文化庁派遣芸術家在外研修員制度と文化庁芸術家在外研修員の会における横井茂の仕事について触れておきたい。横井茂が文部省海外派遣芸術家在外研修員第一期生としてアメリカ、ヨーロッパで研修したことは前項で触れた通りだが、当時はまだ文化庁は発足しておらず、文部省文化局の管轄だった。その文化局から呼ばれて行くと、あなたが選ばれたから1週間で行きたいところを決めてきなさいと言われ驚いたという。その第一期生には美術の奥谷博（独立美術協会、日本芸術院会員）、音楽の若杉弘（指揮者、1935～2009）、演劇の増見利清（演出家、1928～2001）、そして舞踊の横井茂の4名が選ばれている。横井茂はイスタンブール、ギリシャ、イタリア、スペインと回ってからニューヨークに行き、それからパリに戻ってベジャール⁽¹⁸⁾の振付現場を見学したりし、ミュンヘンで若杉弘とオペラを見たりし、さらにウィーン、レンニングラードと回っている。三浦雅士との対談の中で「(見たものの) 三分の一がバレエで、残りの三分の二はオペラ。オペラの贅沢さや演出にも学ぶことがあった」⁽¹⁹⁾と当時を振り返っている。

在外研修制度が発足して20年を迎えようとしていた1986年秋、研修を終えて帰国していた在外研修員に文

化庁から招集がかり、OB会の設立を相談された。そして1987年1月に大崎仁文化庁長官（当時）、安達健二文化庁顧問（当時）の出席を得て「文化庁芸術家在外研修員の会」（略称：在研会）が設立され、第一期役員として横井茂を代表世話人とする35名の世話人が選出された。（その後、世話人は理事と名称を変えた）。筆者が横井茂とが出会ったのはこの時で、以後、20数年にわたる公私の交誼が続くことになる。

そうした集まりの中から、折角ジャンルの異なる芸術家が集まっているのだから、何かクロスオーバーした体験をしたいという機運が生まれ、横井茂、若杉弘の提案によりヘンリー・パーセル作曲「妖精の女王」（The Fairy Queen、1692）⁽²⁰⁾のオペラ＝バレエ化に取り組むことが決まり、1989年秋、文化庁芸術特別推進事業として東京の青山劇場と東京グローブ座で上演された。横井茂は総合プロデューサー、演出・振付を務め、出演者には音楽部門から平野忠彦、丹羽勝海、大川隆子、浅田啓子、大島洋子、等々、舞踊部門から森下洋子、川口ゆり子、安達悦子、清水哲太郎、今村博明、中島伸欣、本間祥公、竹屋啓子、等々、錚々たるメンバーが出演、スタッフも音楽総監督若杉弘、指揮早川正昭、美術・色彩監修絹谷幸二、舞台美術大田創（大阪芸術大学教授）等々、豪華なメンバーでジャンルを超えたクロスオーバーなコラボレーション、オペラとバレエの融合を実現した。この“ジャンルを超えた芸



「妖精の女王」（1989）



「妖精の女王」（1989）

術家によるクロスオーバーなコラボレーション”という考え方は、その後の横井茂作品のもう一つの特徴である。「はじめに」で触れた「トロイの木馬」で、大阪芸術大学デザイン学科教授松井桂三を映像プランナーに起用したのもその表れである。

“意表をつく発想”と“ジャンルを超えた芸術家によるクロスオーバーなコラボレーション”という考え方が最もよく現れた作品が、文化庁芸術家在外研修員の会による文化庁芸術家在外研修制度35周年記念「アートフェスティバル21 21世紀の舞台芸術へ向けて」(2002年、新国立劇場中劇場/助成 = Arts Plan 21 平成13年度文化庁芸術創造基盤整備)におけるカール・オルフ作曲「カルミナ・ブラーナ」(Carmina Brana 1937)⁽²¹⁾である。横井茂は芸術監督・構成・演出を務めた。出演には舞踊部門から多々納みわ子、宮木百合子、安達悦子、堀内充(大阪芸術大学准教授)、等々、音楽部門からは大島洋子、山本真由美、加賀清孝、大島幾雄、等々、指揮は三石精一、荒谷俊二が務めた。

この公演では、初振付作品「美女と野獣」で見られた舞台装置を使わないという横井茂のもう一つの思想が顕著に見られる。「カルミナ・ブラーナ」において横井茂は、舞台上の奥にオーケストラと合唱団を置き、舞台装置として洋画家絹谷幸二(日本芸術院会員、東京芸術大学教授)の作品(オブジェ)を舞台の上手、下手、舞台奥上方(合唱団の上方)に飾るという意表を突くアイデアを見せた。絹谷幸二の作品は誠に色鮮やかで、色彩感の豊かさ、燃えるような赤色の筆使いが特徴であるが、衣裳デザイナー緒方規矩子はその絹谷色に上手くマッチした色鮮やか衣裳をデザインし、絵画と衣裳と舞踊が見事な融合を見せた。緞帳にも絹谷幸二のアフレスコ壁画の模写を使い、開演前から観客に色彩感豊かな世界をイメージさせた演出も見事であった。

舞台評も「《カルミナ・ブラーナ》は、色彩豊かな美術、衣裳の参加により在研制度35周年を祝う華やかな



「カルミナ・ブラーナ」(2002)



「カルミナ・ブラーナ」(2002)



「カルミナ・ブラーナ」(2002)

舞台となった」⁽²²⁾、「舞踊と音楽のコラボレーションと
いうことで見どころがたっぷり。生命の息吹を強く感
じさせる作品」⁽²³⁾と好評で、作曲家、演奏家、舞踊家
によるコラボレーションを高く評価する声が多かった。

ジャンルを超えたコラボレーションにより新しい芸
術の流れを作り出したいとする横井茂の夢の一つは文
化庁芸術家在外研修員の会の存在があって初めて実現
したものと言える。

5. 大阪芸術大学舞台芸術学科の創設に関わる

横井茂は、舞踊作家として27歳でデビューして以
来、半世紀にわたり一貫して日本の新しい現代バレエ
の創作に注力してきたが、本稿では触れなかった作
品、「オンディーヌ」(1971、文化庁芸術祭優秀賞)を
含めると、文化庁芸術祭の大賞・優秀賞・奨励賞合わ
せて12回受賞という未だに破られていない記録を持
っている。その他にも、東京新聞全国舞踊コンクール石
井漠賞(1975)、「紫綬褒章」(1994)、「グローバル松山
樹子賞」(1994)、日本バレエ協会「舞踊文化功労賞」
(1998)、「勲四等旭日小綬章」(2002)と、受賞・受章
を重ねている。

そのキャリアの中で、1973年、横井茂は大阪芸術大
学舞台芸術学科の新設に関わることになる。

当時大阪芸術大学音楽科長の職にあった作曲家諸井
誠から、3号ホール設置を祝う舞台開きに諸井誠作曲
の三重奏曲「有為転変」を上演するのでその演出をし
て欲しいと依頼を受けたことに始まる。モダンダン
サー、日本舞踊、邦楽演奏による極めて現代的公演で
あったという。この作品はフェスティバルホールでも
上演され成功を収めている。そして終演後の打ち上げ
の時、「来年から新しい二つの学科が新設されるが、将
来芸大の華となるべき舞台芸術学科新設のために力を
貸して欲しい」との依頼を受けたという。

こうして1973年9月、横井茂は初めて芸大坂に登
り、その後10回ほどの設立準備会がもたれた。早稲田
大学のように理論中心でいくべきか、舞台芸術は舞台
の板に立ってはじめて存在するのだから実技中心でい
くべきかとする二つの考え方から議論が行われ、舞台
現場を重点にするカリキュラムが組まれていったとい
う。もうすぐ新学期が始まるかという3月の初めに
なつてようやく文部省から設立許可が来て、慌ただし
く1回だけの入試が0号館2階の一室で行われた。面接
官は北村英三(1922～1997)、フランキー堺(1929～
1996)他10数名で、受験生は36名であったとか。

横井茂はその後、2003年には舞台芸術学科長を務め
て2005年3月に退職するまで30年余にわたって毎週東
京と大阪を往復し、東京での舞踊家、大阪での教育者
の生活を続けた。舞踊生活60年の半分にあたる。大阪
芸術大学での30年を振り返って横井茂は「横井イズム
を継承してくれる舞踊家が北海道から九州まで全国各
地に散らばっていて、舞踊の普及に貢献してくれてい
ることがとりわけ嬉しい」という。

おわりに

横井茂作品の本質は初振付作品「美女と野獣」から
『舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル』に至
るまで一貫して流れている。

『舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル』に
おける「限りなき白へ」「夕映えに」「トロイの木馬」
の3作品を見ると、いわゆる舞台装置は使われておら
ず、舞台は極めてシンプルで美しい。これはデビュー
作品以降の多くの作品に見られる横井茂作品の特徴
の一つである。これは「1.能楽宝生流宗家に生まれて、
バレエの世界へ」で述べたように、能楽の家に生まれ、
子供の頃から能に接して能に関する素養を深く培った
ことと無関係ではない。

「限りなき白へ」は、初演の時のタイトルは「限りなき白」であったが、バレエの原点は白であり、その“白のバレエ”に近づきたいバレエ人の願望を語るため“へ”と変題したと言う。装置は舞台奥に立つ抽象的な一本の大きな白い巨大な木と白い床だけであった。先に述べたサミュエル・ベケットの“舞台中央に大きな一本の木が象徴的に置かれているだけ”という空間とかぶさってくる。沢田祐二の照明はその大木の下の方の部分が見えなようにデザインされているが、これは白い衣裳の踊り手たちと殺し合わないよとの考えからで、いかにも沢田祐二らしい繊細で優れた照明デザインである。『舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル』における3作品の舞台美術は藤本久徳が担当しているが、横井茂は藤本久徳とは40年、沢田祐二とは30年を超える共同作業を続けている。横井茂作品の特質を熟知した舞台美術家・照明家の存在は大きいのである。

「夕映えに」はリヒャルト・シュトラウス (Richard Georg Straus, 1864～1949) の曲に振り付けられたものだが、シュトラウスがヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (ドイツ後期ロマン派の詩人、1788～1857) の詩「夕映えに」を読み、そこに老境の自分たち夫婦と同じものを感じ取って作曲されたと言われている。横井作品では春夏秋冬を表す4人のバレリーナの踊りに加え、ソプラノ歌手佐々木典子 (二期会、東京芸術大

学准教授) を登場させている。もう一人の死の象徴とされる登場人物には大阪芸術大学大学院修士課程修了の“俳優”松本壮一郎を起用しているが、「(4人のバレリーナの) 典雅で詩情あふれる踊りは陰影を含んで美しい。このパ・ド・カトルと死の象徴とされる松本壮一郎の重々しい動きが対照的」⁽²⁴⁾ という評価を生み出している。これまた異なるジャンルの芸術家とのコラボレーションという総合的舞台芸術の創造を目指す横井茂作品のもう一つの特徴が上手く活かした例である。

このように見てくると、『舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル』には横井茂作品の特質の全てが現れていて、まさに集大成と言える公演になっていた。

そして79歳になった今もその創作意欲は衰えることなく、2009年9月には「関内ホール・横浜開港150周年記念バレエ公演」の芸術監督を務め、「創作・横浜の人魚姫」の作・演出・振付を行うなど、なお第一線の活躍を見せている。

本稿を書くにあたって、横井茂に3回のインタビューをお願いした。ビデオ、DVDをはじめとする様々な資料の提供を受けたことと共に感謝を記しておきたい。



「限りなき白へ」(2008)



「夕映えに」(2008)

参考文献・註

- (1) 「舞踊生活 60 周年 横井茂バレエ・リサイタル」プログラム
- (2) 映像デザインアシスタントとして、横井茂の教え子である大阪芸術大学舞台芸術学科出身の舞踊家門脇光美が加わっている。門脇光美はその後大阪芸術大学大学院ではデザイン分野に進み、松井桂三のもとで研究を続け、2009 年 3 月に博士（芸術）学位を取得している。
- (3) 「バレリーナへの道 The way to be a BALLERINA73」(株式会社文園社) p.70
- (4) 「バレエ年鑑 2009 Dance Magazine」(新書館、2009 年 2 月) p.066
- (5) 同上、p.066
- (6) 同上、p.069
- (7) 同上、p.069
- (8) 同上、p.069
- (9) ピーター・ブルック、高橋康也・喜志哲雄訳「なにもない空間」(晶文社、1971 年) p.7
- (10) 同上、p.124
- (11) 「バレエ年鑑 2009 Dance Magazine」(新書館、2009 年 2 月) p.069
- (12) 関直人は日本を代表するバレエ振付家の一人で、財団法人井上バレエ団芸術監督。
- (13) ジョージ・バランシン (George Balanchine、1904 ~ 1983) はサントペテルブルグ生まれの 20 世紀の最も進歩的なバレエ振付家。1924 年にソ連を去り、1933 年にアメリカに渡り、ニューヨーク・シティ・バレエ団 (New York City Ballet、1948 ~) を創設した。(バーナード・デイパー著、長野由紀訳「バランシン伝」、株式会社新書館、1993 年)
- (14) ジョン・クランコ (John Cranko、1927 ~ 1973) は南アフリカ連邦生まれのイギリスのバレエ振付家。20 代前半に振付家となり、サドラーズ・ウェルズ・バレエ団のために「パゴダの王子」(1957) を振り付けたほか、自分の名前をもじったレビュー「クランクス」で一躍有名になった。1961 年、ドイツのシュトゥットガルト・バレエ団の芸術監督になり、同バレエ団を世界的な水準に引き上げた。(小学館「日本大百科全書」、1984 年)
- (15) ケネス・マクミラン (Sir Kenneth MacMillan、1929 ~ 1992) はイギリスのバレエ振付家。ナチスから隠れるユダヤ人家族をモチーフにした「隠れ家」(1956)、性暴力をテーマにした「招待」(1960) など挑戦的かつ野心的な作品で注目を集めた。一方、大衆受けするドラマティックな物語的要素の強いバレエを基礎に、女性ダンサーの情感と官能美溢れる作品を得意とした。特に、マーゴ・フォンテインとルドルフ・ヌレエフによる「ロミオとジュリエット」(1965) は有名。1983 年にナイト叙勲。
- (16) 「バレエ年鑑 2009 Dance Magazine」(新書館、2009 年 2 月) p.070
- (17) しらうめ隊 (白梅学徒隊) とは、第二次大戦末期の 1945 年 3 月、「学徒勤労令」により、沖縄戦で従軍補助看護婦として動員され犠牲となった女子学徒隊のうち、沖縄県立第二高等女学校の 4 年生たち 56 名によって編成された部隊である。
- (18) モーリス・ベジャール (Maurice Bejart、1927 ~ 2007) はフランスのバレエ振付家。
- (19) 「バレエ年鑑 2009 Dance Magazine」(新書館、2009 年 2 月) p.070
- (20) 17 世紀イギリスを代表する作曲家ヘンリー・パーセル (Henry Purcell、1659 ~ 1695) が作曲したオペラ。
- (21) ドイツの作曲家カール・オルフ (Carl Orff、1895 ~ 1982) が作曲した舞台形式によるカンタータ。「楽器の伴奏を持ち、舞台場面によって補われる独唱と合唱の為の世俗的歌曲」という副題が付いている。
- (22) 「Ballet バレエ」(音楽之友社、2002 年 5 月号)
- (23) 「ダンスマガジン」(新書館、2002 年 5 月号)
- (24) 「バレリーナへの道 The way to be a BALLERINA73」(株式会社文園社) p.70

横井 茂の年譜

- 1930 5 月 24 日 横井茂：東京生まれ、父は能楽宝生流 17 代目家元の宝生九郎
- 1948 小牧バレエ団入団。
- 1949 東京バレエ団第 6 回公演 (帝国劇場)「シェヘラザード」で初舞台を踏む。
- 1954 小牧バレエ団を退団後、東京バレエ協会の結成に参加
- 1955 東京バレエ協会公演 (日比谷公会堂)
「ジゼル」ジゼル：広瀬佐紀子 アルブレヒト：横井 茂
- 1957 横井茂・太田昭子バレエ団公演 (日本青年館)
初振付作品「鼻」「美女と野獣」
- 1960 「真の日本人の手による日本のバレエ創造」を活動の主題として、東京バレエグループ結成。第一回東京バレエグループ公演 (東横ホール)
「オルフェ 1960」「無言歌」「城砦」文部省芸術祭奨励賞。舞踊バンクラブ作品賞受賞。
- 1962 「ハムレット」文部省芸術祭奨励賞。舞踊バンクラブ演

- 出賞受賞。
- 1963 「ドン・ファン」「紐」
- 1964 「リチャード三世」文部省芸術祭賞。舞踊ペンクラブ
作品賞受賞。
- 1965 文部省芸術祭主催公演「マクベス」「エウリディーチェ」
「能による小品集」
- 1966 「オセロ」文部省芸術祭奨励賞受賞。
- 1967 「リア王」文部省芸術祭奨励賞受賞。横井茂は1967
年より1968年にわたり文部省海外派遣芸術家在外研
修員第一期生としてアメリカ、ヨーロッパで研修。
- 1969 「ソドムとゴモラ」文化庁芸術祭奨励賞受賞。
- 1970 文化庁芸術祭主催公演「交響曲」「ロミオとジュリエット」
第一回舞踊批評家協会賞受賞。
- 1971 「オンディーヌ」文化庁芸術祭優秀賞受賞。
- 1972 「鮫」文化庁芸術祭優秀賞受賞。
- 1973 「皇子の名はタケル」「幻」他
- 1974 「不死鳥」「おでこのこいつ」「花のワルツ」他
- 1975 「変容の鐘」文化庁芸術祭優秀賞。東京新聞全国舞
踊コンクール石井漠賞受賞。
- 1976 「バ・ド・ドゥ」「沈黙」により芸術撰文部大臣賞受賞
- 1977 「求塚」他、(新井雅子リサイタルを兼ねる)
新井雅子は1977年より1978年まで、文化庁海外派遣
芸術家在外研修員十一期生としてアメリカ、ヨーロッ
パにて、バレエの技法とその教育法を研修。
- 1978 「バ・ド・ドゥⅡ」「白炎」文化庁芸術祭優秀賞受賞
- 1979 「昭和二十年夏」文化庁芸術祭優秀賞 橘 秋子賞新
人賞受賞。
- 1980 文化庁芸術祭主催公演「風の馬」「ベスト」
- 1981 「さとうきび畑の墓標」
- 1982 「バ・ド・ドゥⅢ」「ジャンヌ・ダルク」他
- 1983 「青髭」他
- 1984 4月より9週間にわたり、文化庁、国際交流基金、
NHKの支援を得て、アメリカ・カナダにて30回の公
演を行い、大きな成果をおさめた。
11月民主音楽協会公演「ウイーンの娘」「白虹」「ジャ
ンヌ・ダルク」
- 1985 「限りなき白」「風さそふ花」「月下咆哮」
- 1986 グループの活動とし、9月12日草月ホールにて「三上
真理子ダンス・リサイタル」を行い、「絵馬」「津軽花
嫁人形」の作品を発表。
12月22日ABCホールにて「第二回新井雅子バレエ・
リサイタル」を行い、「花」「誕生」「渦」の作品を発表。
- 1987 3月12日ABCホールにて
- 「細野美江子 ミチヨ・ノグチ 辻元早苗ジョイントリ
サイタル」
- 11月「Der Krebs」-「瘡」を発表。
- 1989 「コンチェルト・グロッソ」「め組の男」を発表。
- 1990 文化庁在外研修員の会 青山劇場・東京グローブ座
主催、文化庁芸術特別推進事業、「妖精の女王」の
総合プロデューサー及び、演出。「翔べよ孔雀」「婆沙
羅」「虚空遍歴」「るつぽ」発表。
- 1991 「BURLESKE (ブルレスケ)」「青ざめた馬」「夕映え
に」「錆びた冠」
- 1992 文化庁芸術祭主催公演にて「ヤマタイカ」を上演、舞
台芸術振興基金の援助を受け、大阪、北九州、福岡、
熊本、延岡、徳島等にて公演。
- 1993より 東京グローブ座にてウィリアム・シェイクスピア作品の
連続公演を行う。
「ファンファーレ」「夏の夜の夢」
- 1994 「オフィーリアは水の精」「リチャード三世」
紫綬褒章、グローバル松山樹子賞受賞。
- 1995 「リア王」「夕映えに」
- 1996 「冬物語」
- 1997 「テンベスト」
- 1998 「冬の蝶」5月日本バレエ協会「舞踊文化功労賞」受賞。
- 2002 文化庁芸術家在外研修員の会公演「カルミナ・ブラー
ナ」の演出振付。
11月 勲四等旭日小綬章 受章。
- 2008 舞踊生活60周年 横井茂バレエ・リサイタル「限りな
き白へ」「夕映えに」「トロイの木馬」
- 2008 関内ホール・横浜開港150周年記念プレ・バレエ公演
「枯葉と詩人」「エリアナ・パプロワを偲んで〜」
- 2009 関内ホール・横浜開港150周年記念バレエ公演「創
作・横浜の人魚姫」
- 2009 橘 秋子賞功労賞。
- 他に次の作品を創作発表している。「ノクターン」「賛
歌」「うてなの上に」等。
また「ラインの黄金」「タンホイザー」「ルサルカ」「ユ
ニコーン」等のオペラの演出振付、(財)日本オペレッ
タ協会のオペレッタの振付、日本舞踊の構成演出も数
多く行っている。